

小児心身症の背景としての親（父）子関係

— 家族関係診断目録（FRI）による検討 —

鈴木 榮（金城学院大学家政学部）

小崎 武，北條 泰男（国立名古屋病院小児科）

久世 敏雄，小島 秀夫，内山伊知郎（名古屋大学教育学部教育心理学科）

われわれは小児心身症の背景としての親子関係について主にFRI（家族関係診断目録）を用いての調査を続けているが、前年度実施した標準群についての検討結果から、その内容の一部を改めたので、今年度からはこの改訂版FRIを用いている。また今年度からは「家庭生活調査」カードも作製し、あわせて調査を行っている。

昭和59年度研究報告

1 改訂FRIによる検討

今回は昭和57年6月から59年12月までに国立名古屋病院に入院して、医学的にも精査できた43例について検討を加えた。症例の詳細は表1～3のようである。このうち検討データが揃っている36名の分析結果は以下のようなものである。

- 1) 16項目についての平均点は正常母集団と有意差を示さなかった。
- 2) 点数のバラツキでみて有意であったのは、母親では子供の受容が弱く、統制、支配が強い2項目、父親では子供の社会性の促進が弱いという項目であ

った。

- 3) 父母の点数の差についての検討では、配偶者間の力関係の強弱に差が大きく、家庭内外の援助体制の欠如の感じ方の差が大きいという傾向がみられた。
- 4) 正常母集団ではまず認められない29点以下と71点以上の項目は母親に多くみられた。
- 5) 以上の結果を総合すると、夫婦間の力関係では母の方が強く、また母は夫婦間のコミュニケーションが悪い、援助体制もよくないと感じていると言えそうである。反対に弱い父親像も浮かび上がってくる。今回の結論は以上のようなものであるが、検討方法がこれでいいかどうかと言う点も含めて、今後更に例数を増して検討する予定である。

2 家庭生活調査

直接的な質問によらない方が本音を答えて貰えるのではないかと試作されたもので、現在多数の症例に使用中である。

この検討は次年度にゆずる。

表1 性別

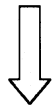
入院患者43名	
男	17名
女	26名

表2 年齢別

入院患者43名の年齢	
7歳	2名
8歳	2名
9歳	5名
10歳	8名
11歳	2名
12歳	7名
13歳	7名
14歳	10名

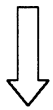
表3 主訴

入院患者43名の主訴	
(57年6月—59年12月)	
発熱	12件
頭痛	11件
腹痛	8件
体重減少	3件
チック	3件
咳	2件
呼吸困難	2件
昼間遺尿	1件
下血	1件



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



われわれは小児心身症の背景としての親子関係について主に FRI(家族関係診断目録)を用いての調査を続けているが、前年度実施した標準群についての検討結果から、その内容の一部を改めたので、今年度からはこの改訂版 FRI を用いている。また今年度からは「家庭生活調査」カードも作製し、あわせて調査を行なっている。